

## 第37 回日本比較内分泌学会大会・サテライト企画～中堅・若手の会

会 期：2012年11月29日（木）13時～19時

会 場：福井大学文京キャンパス総合研究棟I 13階大会議室

〒910-8507 福井市文京3-9-1

日 程

第一部 ペプチド・ホルモン研究会 13時00分～16時50分

第二部 若手交流会 17時00分～19時00分

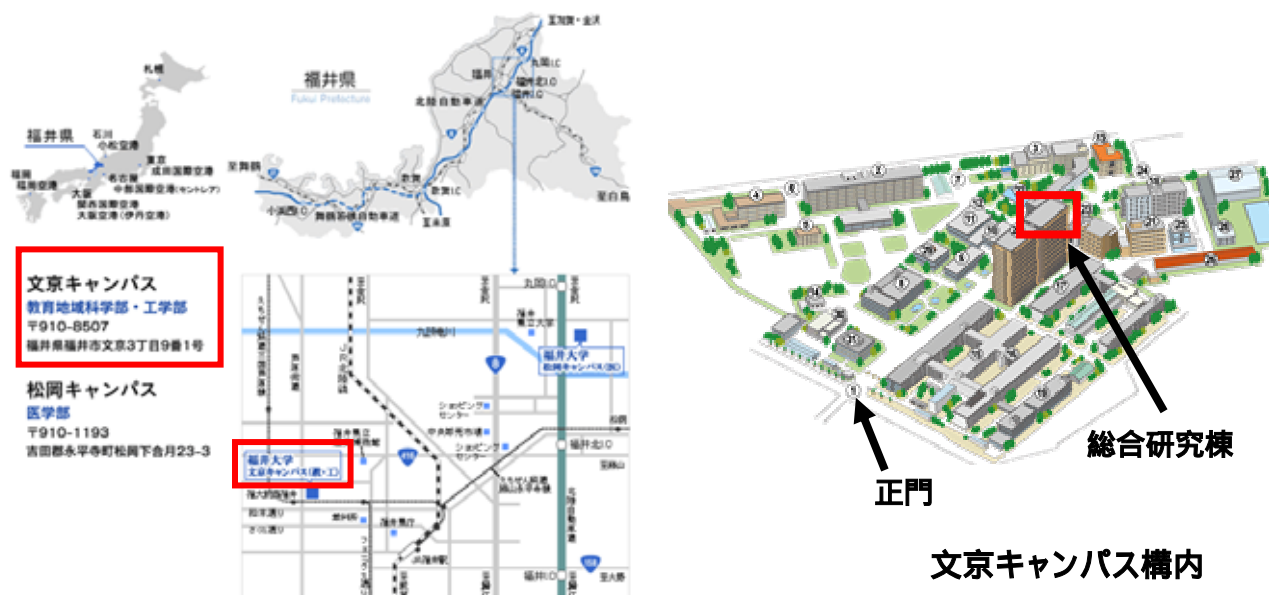
参加費：無料

第三部 懇親会（福井市片町周辺を予定） 19時30分から

### 福井大学文京キャンパスへのアクセス

#### JR 福井駅から

- ・ 鉄道：福井駅東口を出てえちぜん鉄道「三国芦原線」行に乗車して、5 駅目の「福大前西福井」で下車し、徒歩3分で大学正門に着きます。所要時間は約10分で運賃は150円です（30分おきに運行）。
- ・ バス：福井駅西口を出て、路線番号21系統「幾久・新田塚線」、28系統「運転教育センター線」に乗車して、「福井大学前」で下車すると大学正門に着きます。所要時間は約10分で運賃は200円程度です（30分おきの運行）。
- ・ タクシー：駅東口のタクシー乗り場から所要時間約10分で着きます。運賃は約1,000円です。



## 第一部 第3回ペプチド・ホルモン研究会

### ～中堅・若手が描くペプチド・ホルモン研究の展望

ペプチド・ホルモン研究会は、2011年3月に宮崎大学の井田隆徳さんが立ち上げられた、ペプチドやホルモンの研究に関係する中堅・若手の勉強会・交流会を目的としております。今春、広島大学の浮穴和義さんが引き継がれた第2回を経て、今回は、福井大学文京キャンパスにて、日本比較内分泌学会大会のサテライト企画として、若手交流会と合同で開催させていただきます。

今回の研究会では、「中堅・若手が描くペプチド・ホルモン研究の展望」と題して、若い世代からペプチド・ホルモン研究の未来の構想を発信したいと考えております。そこで、会の冒頭では、ペプチド・ホルモン研究分野の気鋭な研究者の皆様、これまでの研究成果にとどまらず、将来を見据えた今後の展望を御講演いただく予定です。後半のショートオーラルでは、若手を中心に、研究発表と盛んなディスカッションを行い、大いに自分をアピールしていただきます。師走に差し掛かるお忙しい時期ではございますが、是非とも福井に御参集いただき、研究の近況と今後についての意見交換と親交を深めることができればと存じ上げます。皆様の御参加を心よりお待ちしております。

## プログラム

オーガナイザー：海谷啓之（国循）、根本崇宏（日医大）、佐藤貴弘（久留米大）、  
井田隆徳（宮崎大）、浮穴和義（広島大）、矢澤隆志（福井大）

後援：日本比較内分泌学会

協賛：公益財団法人 サントリー生命科学財団

13:00-13:05 挨拶

13:05-15:15 講演（発表15分 質疑5分）

座長 浮穴 和義(広島大学)

1. 海谷啓之（国立循環器病研究センター・生化学部）

「何故、いろんな動物でホルモンを獲るのか、そして研究するのか」

2. 関口俊男（金沢大学・環日本海域環境研究センター）

「原索動物をモデルとしたペプチド・ホルモン研究」

3. 根本崇宏（日本医科大学・大学院医学研究科）

「ストレスと摂食と生殖：私立単科医科大学での研究」

休憩（14:05-14:15）

座長 矢澤 隆志 (福井大学)

4. 井田隆徳・岩元絵里 (宮崎大学・IR 推進機構)  
「地方国立大学でのPIとしての挑戦」
5. 佐藤貴弘 (久留米大学・分子生命科学研究所)  
「グレリンの生理機能解析～世界との競争の中で学んだこと」
6. 幸田修一 (アスピオファーマ株式会社・薬理第一ファカルティ)  
「Molecular Genetic Dissection of Neuronal Pathways Controlling Energy Homeostasis.  
～企業研究者としてアカデミア研究者として創薬イノベーションへ～」

15:15-15:30 休憩

15:30-16:50 ショートオーラル (発表8分 質疑3分)

座長 蓮沼 至 (東邦大学)

1. 岡田令子 (静岡大・創造院)  
「両生類下垂体ホルモンの分泌調節」
2. 柴田侑毅<sup>1</sup>、竹内浩昭<sup>1</sup>、長谷川敬展<sup>1</sup>、鈴木雅一<sup>1</sup>、田中滋康<sup>1</sup>、Stanley Hillyard<sup>2</sup>、  
長井孝紀<sup>3</sup> ( <sup>1</sup>静岡大・創造院、<sup>2</sup>ネバダ大・歯科医学、<sup>3</sup>慶応大・医・生物 )  
「砂漠に生息するヒキガエルの水バランス調節」
3. 伊賀正年 (東大院・新領域・先端生命)  
「Pigment dispersing factorを介した新たなエクジソン生合成調節機構の発見」

座長 佐藤貴弘 (久留米大学)

4. 長谷川和哉、秋枝さやか、伊達紫 (宮崎大学フロンティア科学実験総合センター)  
「肥満抵抗性ラットの炎症性マーカーの検討」
5. 秋枝さやか、長谷川和哉、伊達紫 (宮崎大学フロンティア科学実験総合センター)  
「肥満抵抗性ラットから見出した生理活性物質による脂肪滴蓄積抑制作用」
6. 小林浩志、藤澤静香、小西裕己、寒河江望、蓮沼至、岩室祥一 (東邦大・理・生物)  
「両生類脳内に発現する抗菌ペプチド遺伝子」
7. 河邊真也 (福井大・医)  
「転写因子LRH-1の卵巣特異的アイソフォームの転写制御機構」

## 第二部 日本比較内分泌学会 若手交流会

### 「失敗から学ぶ～若手研究者ならではの経験～」

#### 本会の主旨

大学院生や若手研究者の皆さんのなかには、研究で失敗したり、思うように研究が進まなかったりすることが、きっとあるでしょう。そんなとき、どのようにして乗り越えているのでしょうか。

今回の交流会では、比較内分泌学を中心とした分野で現在研究者として仕事をされている若手の方々を演者に招いて、学生時代から現在までに経験されてきた数々の失敗と、それを成功にかえるヒントについて、話していただきます。また、講演会の後には、参加者同士が自由に話していただく意見交換会の場を設けます。

本会は、所属や職歴などにとらわれず、多くの参加者が交流できるような、形式張らない会にしたいと考えていますので、若手研究者をはじめ、大学院生・学部生の皆様も、ふるってご参加ください。

オーガナイザー：日下部 誠（東京大学）、加川 尚（近畿大学）、矢澤 隆志（福井大学）

#### プログラム

17:00-	1 . はじめに	日下部 誠（東京大学）
17:10-	2 . 「失敗から学んだこと - サンプルの重要性 - 」	天野 春菜（北里大学）
17:40-	3 . 「小さな失敗、大きな後悔」	土 田 努（富山大学）
18:10-	4 . 「失敗の連続の比較内分泌学」	矢澤 隆志（福井大学）
18:40-	5 . 意見交換会と統括	加川 尚（近畿大学）

交流会後に懇親会も予定しています。気軽にご参加下さい

## **講演要旨**

### **「失敗から学んだこと - サンプルの重要性 -」**

**天野 春菜 (北里大学)**

これまでたくさんの失敗をしています。最大の失敗は、サンプルの中に対象種ではないものが入っていて、それに気づけなかったことです。この失敗で修士1年間を棒に振ってしまいました。修士から博士課程では、ボラの卵黄形成機構について研究していました。当時、大阪湾で採取したボラ(後のメナダ)と三重県の五ヶ所湾のボラ(本物のボラ)のサンプル、それぞれに対する抗体がありました。始めは同じ「ボラ」だと思い込んでいたので、全く気にせず実験を行っていました。しかし、その後、大阪サンプルで作った抗体は大阪の個体と反応するが、三重とは反応しないなどがわかりました。サンプルにボラとメナダの2魚種が混ざっていたこと、抗体の性状と複数の卵黄蛋白の存在が全くわかっていなかったことが混乱の原因でした。この失敗以降、できるだけサンプルは自分で取る(確認する)こと、抗体の性状をよく調べることを心がけています。

### **「小さな失敗、大きな後悔」**

**土 田 努 (富山大学)**

やらかした失敗が夢にまで出てきて、たまらず夜中に飛び起きた、という経験は誰しもにあるだろう。このような苦い失敗を、人は決して繰り返さない。それに対して、怠けや見通しの甘さによる小さな失敗は、「まあいいか」で済まされてしまうことも多い。しかし、これらは時間とともに積み積もって、やがて大きな問題として露呈するのである。

学部生の頃の私は、研究者に対するボンヤリとした憧れを抱いていたものの、さして努力せず具体的に動きもしなかった。修士卒で就職して数年が経ち、やっぱり研究がやりたいと会社を辞め、博士課程に入学した頃には、同じ年の研究者とは知識、技術、業績に大きな隔たりが出来ていた。その後私は、あのモラトリアムな日々が失敗であったことに気付くのである。本会では、私自身の失敗経験をネタにして、そのような状態からなんとか研究室を構えるまでに至った経緯をお話したい。

### **「失敗の連続の比較内分泌学」**

**矢澤 隆志 (福井大学)**

学生の頃は、「研究は、最初は失敗して当たり前」と言われた記憶があります。それから随分と長い年月が過ぎて、研究を始めてから随分になります。未だに失敗の連続です。学生時代は、イモリの精子形成の内分泌制御の研究をしていたのですが、「失敗して当たり前」のはずが、予想を超える失敗をしては指導教員の先生方に、ひどく怒られる日々でした。さすがに懲りたのか、徐々に recovery することを覚えて、何とか現在に至り、ステロイドホルモンを中心とした生殖現象の研究を続けているように思います。時効となった(はずの)話を中心に、お話できる範囲でどんな失敗をして、その後、どうなったかをお話したいと思います。私と同じ轍を踏まないよう、そして、失敗時の対処法として参考になれば幸いです。